土屋久雄編

旧金津城主溝家

落城とその後

松原信之

北国庄園と呼ばれた奈良興福寺兼春日社の庄園、河口庄は十郷に分かれ、その一つに溝江郷がある。ここに土着した朝倉氏の一族が在地名をとって溝江氏を称した。「大乗院寺社雑事記」にも河口庄の庄官の一人として名を留めている。溝江氏は朝倉氏滅亡後、織田信長に帰順して金津（溝江館）に在城したが、天正二年（一五七四）二月十九日、一向一揆に攻められて滅亡した。しかし、溝江大炊助長逸の一子、長澄だけは城を脱出して助かり、後に豊臣秀吉に仕えて本領を安堵され、再び金津城を再興した。長澄の跡はその子、彦三郎長晴が継承したが、時代は大きく変貌し、ついに井伊直孝に仕えて明治維新を迎えた。

本書は、この溝江家に関する文書を中心に編集されたものである。ここに取り上げられた溝江文書十四点は影写本によるものや、東京の成簀堂文庫に伝来してきたもので、上限は天正十年（一五八二）の織田信長黒印状から下限は元和二年（一六一六）井伊直滋書状までの、いわゆる中世文書の分類に入るもので、字体は難解である。しかし、幸いにして読み下しや解説の指導は、その道の専門家、東京大学史料編纂所の橋本政宣氏が当たられたとの由、この種の刊行としては信頼の高いものといえよう。

天正元年朝倉氏の滅亡、それに続く一向一揆の蜂起、さらに再度にわたる織田信長の越前平定のための侵攻と、大動乱の中を生き抜いた朝倉旧家臣は少ない。その中で溝江氏は数少ない一例である。ただ惜しむらくは、本書では朝倉時代における溝江氏の研究はあまり取り入れられていないが、天正以降の溝江氏の動向については文書が多くを語ってくれるし、特に溝江氏が越前において本領を安堵された新事実は誠に貴重な史料というべきであろう。

（金津町教育委員会刊　九五ページ　B5判　定価九八〇円）